

がん診療レジデントマニュアル 第8版

国立がん研究センター内科レジデント(編)

神戸大大学院教授・腫瘍・血液内科学

南 博信

重要な知見が要領よくまとまった
現場で役立つマニュアル

『がん診療レジデントマニュアル』が改訂され第8版が出版された。初版が世に出されたのが1997年だから22年にもわたって利用されていることになる。本マニュアルは疫学・診断から治療までを要領よく網羅しコンパクトサイズにまとめているため、白衣のポケットに入れてベッドサイドで知識を確認するために便利に活用できる。国立がん研究センターの若手内科医が書いているので、治療それも薬物療法が中心にまとめられている。がん薬物療法に携わっている内科医がよく利用しているのも理解できる。

目を通してもらうとわかるが、本マニュアルの薬物療法の記載には全て根拠論文が示されている。患者さんは一人として同じ人はいないのだから、マニュアルだけでは実際の治療はできない。必ず根拠論文をあたって、その治療をどのような患者さんのどのような状況でどのように使うべきか、その効果の大きさと副作用の程度からどの位の有用性が期待できるのかを把握してから治療に当たる必要がある。今は病棟や外来でも簡単にインターネットにアクセスできる時代である。この根拠論文は必ず役に立つはずである。逆に言えば、必ず根拠論文をあたってから治療に臨まねばならない。治療の根拠論文にすぐたどり着けるという意味でも、本マニュアルは非常に便利な一冊である。

日本臨床腫瘍学会のがん薬物療法専門医試験会場では、試験開始前やあるいは休憩時間にこの『がん診療レジデントマニュアル』で知識の整理をしている受験生がほとんどと言ってよいくらいに多い。それだけ信頼されている。このマニ

ュアルで試験勉強をしている人もいと聞く。しかし、本マニュアルは日常がん診療にあたって素早く知識を確認するために使用することを念頭に書かれている。したがって、がん薬物療法の基本的な考え方、原理・原則を学ぶためには書かれていない。あくまでも知識の整理・確認のためのマニュアルであり教科書ではない。試験前に知識を確認するのはよいが、腫瘍内科学の本質は本マニュアルでは学習できない。DeVitaや日本臨床腫瘍学会などが出している教科書で腫瘍内科学の本質をきちんと学んでから、本マニュアルで知識を整理してほしい。

本マニュアルはほぼ3年ごとに改定され常に新しい治療を取り入れている。しかし、がん薬物療法は進歩が目覚ましく、毎年治療体系が変わっている。実際に、本マニュアルが出版された後の半年でも治療体系が変わったがんもある。本マニュアルに頼るだけでなく、がん治療に携わる者は常に新しい情報を把握する努力が必要である。

とはいえ、本マニュアルでは重要な知見を要領よくまとめられており、がん診療の現場で必ず役に立つはずである。私も常に白衣のポケットに入れている。本マニュアルが有効に活用され、がん薬物治療の向上に貢献することを願って止まない。



●B6 変型/頁 584/2019 年
定価：本体 4,000 円＋税
[ISBN978-4-260-03915-4]
医学書院 刊